占いはひとつの〝情報〟として利用するもの。占いで人生を左右されるのは考えものです。

竹村亞希子（38歳）
占いの玉手箱主宰

2000円のもとでで、この商売を始めました(笑)。交通費が1000円で、名刺代が1000円。今から9年前のことですが。最初は会社まわりからスタートしたんです。営業したわけですよ。まったく誰にも知られてない無名の占い師でしたから、会社を相手にイベントしませんかと、歩きまわりました。その当時、占いのイベントなんて、SPの人でも知りませんでしたからね。それは一体何なのか？皆さん興味を示されまして。こんな具合にすると、明るいイメージでファッション的にやれると提案したんです。占いというと神秘的でちょっとおどろおどろしいイメージってあるでしょ。そうじゃないイベントしましょうと……。

職業としての占い師の世界をまったく知らなかったからできたんでしょうね。従来の業界を知っていたら、そんなことできなかったと思いますよ。後でわかったことですけれど、すごく封建的で、近代化されてなかったんですね。だから料金設定もなかったみたい。志だとかね。そんな世界ですよ。まさかそれを明るいイメージでイベントに使うとか、若い人を対象にするという発想が生まれるわけありませんよ。だから、何も知らない私にできたわけです。

最近では、占いを〝人事〟に利用する企業も出てきたんですよ。採用予定者の生年月日、氏名などのデータを持ってきて、最後の欄に、私の占いを載せて下さいという、人事の方もいらっしゃるぐらいですからね。「占い」というものを、ひとつの〝情報〟だと考えてる人が増えているんじゃないでしょうか？

「占い」というのは、目に見えないものを（たとえば未来とか）、具体的に導きだす方法ですから、それを依頼人にわかりやすく伝達するのがポイントなんです。ひとつの答を出すまで、たくさんの作業がプロセスに隠れているんですよ。

大切なことは、私たちが出した答を、依頼人が自分の頭でもう一度確認することですね。自分の人生経験と照らし合わせて、答を自分なりに消化して、行動に移すべきなんです。占いは、ひとつの〝情報〟なんですよ。他人の言ったことをうのみにして、人生左右されるなんて、馬鹿らしいと思いませんか。重要なのは、その情報をうまく利用してどう役立てるかですよ。

竹村亞希子（たけむらあきこ）　昭和24年名古屋市生まれ。淑徳高校卒。中学2年の時に、仙人のような風采の男が突然現われ、人相、手相、易学、命宮学などを5年間に渡り、ミッチリ教え込まれる。当初入社した横浜銀行名古屋支店を結婚を理由に退社。占い師（笠竹）に転身する。現在は30人のスタッフを率いる「占いの玉手箱」（☎935-4170）の代表。本誌でもホロスコープを担当していただいてお馴染みだ。最近「運を呼ぶ化粧　逃す化粧」（こま書房）を発刊。執筆活動でも忙しい。3児の母親でもある。